この本、私にとって、面白かったです

早崎　繁子

一番読みたい【読書論】は、本を読まない人が書いた【読書論】だろう。「本を読むな」と言っても読む人は絶対に読むのをやめない。「サッカーをするな」と言ってもサッカーをする人はサッカーをやめない。これは等価である。読書を好む人が書く【読書論】は同工異曲、読まない人にちょっと上から目線。いやパンツを脱いだすごい人もいる。二〇〇二年、太田出版、柄谷行人他『必読書１５０』・・現実に立ち向かうために「教養」がいるのだ。カントもマルクスもフロイトも読んでいないで、何ができるというのか。我々はサルにもわかる本を出すことをしない。単に、このリストにある程度の本を読んでいないような者はサルである、というだけである。……まるで示現流の一撃。こういう人の周りには必ずおべっか使いがコバンザメのごとくひっついている。

渡部直巳という男であるが、後年、彼は早稲田でセクハラ事件を起こし、大学を放逐された。哀れである。惨めである。「この一五〇冊を読んだ人間はこうなっちゃうの？」。自立していないのである。このためいつまでも子供のままなのである。

弊社専務の友人に横山峯雲という人物がいる。会社員時代、多忙のすきを見て、奥の細道を歩き抜いた。「万巻の書を読み、旅をした（このひと鉄斎か）。ゆく河の流れは絶えずしてがすべて。大河の一滴でも良いが。秩父の四萬部寺で悟った。方丈記一冊で十分です。諸君、屈託のない人生を過ごしなさい」。はたから見ても気持ちが良い。

横道に逸れましたね。私がお薦めする本は、楠木建　『好きなようにしてくださいたった一つの「仕事」の原則』（ダイヤモンド社）　『すべては「好き嫌い」から始まる』（文藝春秋）です。前著は作者が若者の進路相談に答える形。発声一番、小気味よく「好きなようにしてください」と言い切る。はっきりしている。考えに不純物がない。「人が勉強する目的は、究極的には一つだけ。自分の頭で考え、自分の意見を持ち、それを自分の言葉で表明する。これに尽きる。人生に大事なことは自分の価値観を持つことである。世間の価値観より、それに従って生きられればいい。それが自立ということだ。

僕の基本的な信念は、人間、九十九％は好きなようにやれということです。一番いけないのは●●せざるをえないと、勝手に思い込むことです。一方的に自分だけ得をしようとする人生はありえない。人生はトレードオフ。……体にこびりついた重たい汗と垢を、猛暑の昼中、滝に打たれてサッパリする感じでした。

以前似たような感覚の言葉に出会った。「自分の水準に合わないものは、無理して読むな。水準が低すぎるものも、水準が高すぎるものも、読むだけ時間のムダである」。立花隆の忠告。

自分がわかったと思えることが重要で、それ以上のわかりかたはない。身に沁みますねえ。むかし、サントリーオールドの宣伝で流れた音曲が耳の奥に復活する。自身もオールドになりました。絶対に読むべき本など、世の中に無いのである。大切なことは、自分にとっての名作、名著を見つけることであり、考えれば思うに、それはそれは楽しい旅なのである。

弊社の事務所二階は、大会議室／小部屋二室／第二応接室になっているが、月一回大会議室を使用するだけなので、閑静、閑寂を通り過ぎて、深山幽谷である。応接室からは森に包まれた長塚節の生家が見え、筑波山を背景にした美しい里山が広がっている。専務などは朝二階に上がると午前中は降りてこない。何をやっているのやら。

本州製紙の工場跡を倉庫に改造したので、実験室が一階にある。四季を通して湿度を一定に保つことができるので、そこが図書室になっている。（写真参照）

社員は勝手に本を自宅に持って行ってかまわないが、戻すとき、必ず書見台に置いておく約束になっている。変な所に差し込まれても困るのである。（私は司書か）

最近置かれていた本が面白かったので紹介して、この文章を閉じます。

● 西原理恵子　『洗えば使える　泥名言』　（文春文庫）
二〇一九年五月一〇日　第一刷

● 八柳鐵郎　『すすきのの女たち』　（北海道新聞社）
一九九七年二月二七日　第四刷